

# 埴輪「琴を弾く男子」の謎

前橋市立天川小学校六年 萩原基心

## 1. 研究のきっかけ

ぼくは、歴史と音楽が好きです。以前、高崎市にある、かみつけの里博物館に行き、たくさんの埴輪を見ました。その中で、一番気になったのが「琴を弾く男子」の埴輪です。音楽が好きでぼくとしては、その時代の音楽や、琴を奏でている人の家からなどを調べたいと思いました。

## 2. 群馬県内で出土した琴を弾く男子像

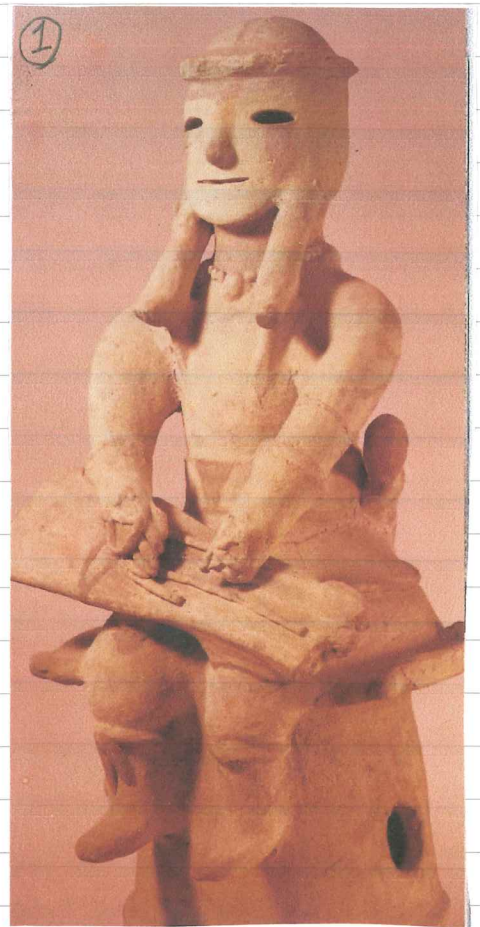
まずは県内で出土した琴を弾く男子像の中で家の近くの地域から出た物。二つに着目して、考えようと思いました。

### ① 文化財名：埴輪男子倚像

この埴輪が出土した所は、勢多郡上川洲村です。国指定重要文化財に指定されています。

古墳時代、6世紀～7世紀に作られた物で、全高は72.6cm、像高が55cmある埴輪です。

別名弾琴像と言われる琴を奏でている埴輪で、武装像の形態に近いです。琴弓弦は、四弦です。



### ② 文化財名：琴を弾く男

この埴輪は太田市の世良田諏訪下遺跡で出土。古墳の周りに、すまなく並べられた物の一つです。



勢多郡上川洲村は現在の~~前橋市~~朝倉町です。

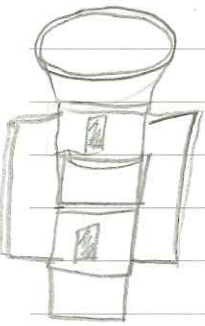
埴輪は、素焼きの焼き物で、古墳の上などに並べて置かれました。弥生時代後期の二世紀ごろに吉備地方(現岡山県)で、土を盛り上げて丘にした埴輪墓に焼き物のつぼと、それをのせた台が置かれたのが埴輪の始まりとなったと考えられています。

①は、群馬県太田市の上野塚廻り古墳です。埴輪が古墳に置かれていたときのようすが復元されています。この古墳から出土した埴輪は、首長のような人を中心として、アクセサリーを身につけた埴輪などが並べられています。



古墳時代の三世紀中ごろに、「円筒埴輪」とよばれる筒形の埴輪がつくられ、古墳のまわりをかざりようになります。この円筒は食器をのせる台、または食器としてのつぼを表しているという説が有力らしく、日常生活で使っている物を埴輪にしたとも考えられます。

四世紀後半には、家や船首を表す埴輪が作られ、五世紀半ばには、人物や動物の埴輪があらわれました。



円筒埴輪は、古墳のまわりや中段をかこむように列にして並べることがほとんどで、古墳の土がくずれないようにしたり、古墳という聖域を区画するために円筒埴輪を置いたと考えられています。

それに対して、人物埴輪や動物埴輪を置いた理由ははっきりしませんが、古墳をかざりためあるいは、何かの儀式のために置いたという説があります。

古墳時代は文字がほとんど使われていなかたため、埴輪の形は、当時の人々を知る手がかりとなります。

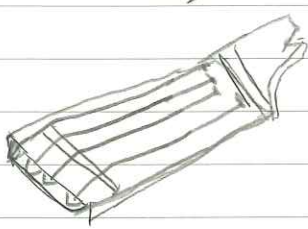


そこで、もう一度、琴を弾く男子、二体を見て、考えてみました。

この二つを見て思うのは、どちらも琴を座って演奏しています。また、かみ型も似ていて、首にかざりを身につけています。演奏方法は、琴をひざに垂せて、片手で弦をおさえ、もう片方の手で弦を弾いているように見えます。

古墳時代の男性の平均身長が約160cmなので、琴の大きさは、60cmくらいなのではないでしょうか。

### 〈想像図〉



木の板の切りこみに糸を張って、指かバチのような物ではじいていたのではないかと考えました。

### 3. 琴の歴史

琴についてもう少し詳しく調べてみました。



和琴(わごん)・別名を倭琴(やまとご)ともいいます。

日本の楽器の多くが外国から伝来した中で、和琴はその祖形を古代の日本にまで遡ることのできる、数少ない日本固有の楽器です。

古代の日本には、「コト・フエ・ツツ・ミスズ・ヌリテ(銅たく)」などの楽器があったと考えられています。中でも「コト」は単なる楽器を超越した、神聖な存在でした。男性によって使用され、王位継承のシンボルでもあり、神事で用いられる祭器でもあったそうです。

今日に伝わる和琴は、木相材の胴には、6本の絹弦が張られ、尾部は4色の糸の編みひもで上められています。

今の琴に比べて、古代の日本の琴は、胴が短いため、音域がせまいと考えられます。弦が少なく、同時に出せる音も、少ないと思います。部品も少なく、音のひびきも良くなさそうです。片手でおさえで演奏している、音の变化はあったと考えられますが、今のようには音階があることにはなかなたのではないかと思います。ここから、今の音楽とは音の感じ方がちがうのではないかと思います。

#### 4. 楽器の歴史

音を出す道具としての最初の楽器は叩いたり振ったりする物でした。たとえば、近くの石を叩いたり、木の棒を叩いたりして音を出したりしていたと考えられています。やがて、人はもっと長時間音を維持させたいと考えるようになりました。そこで「からから」のような振ったりして音を出す楽器を作った、という話なのです。

多くの文化圏で、ラトルが伝統的な儀式で踊りの動きに勢いをつけるために使われたようです。



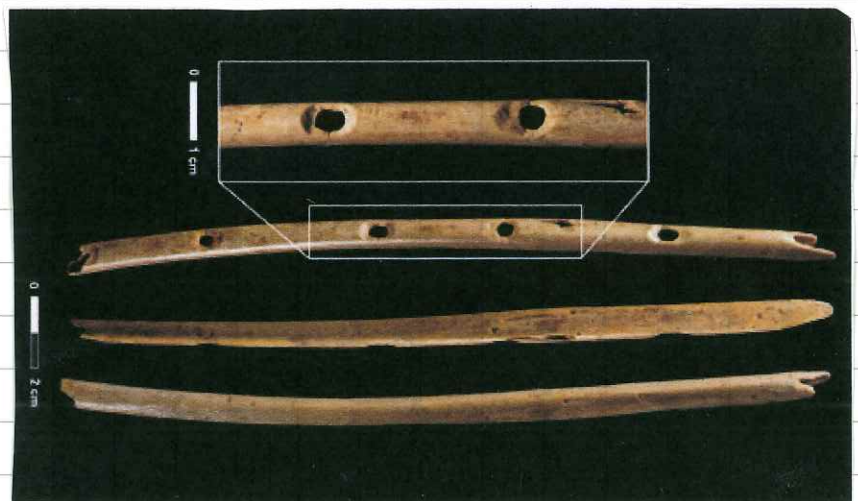
Gakkigaku Shiryōkan, Kunitachi College of Music

からから(ラトル)・メキシコ

旧石器時代には、笛が登場しました。骨のフルートと思われる笛が発見されています。そして、打楽器・管楽器に続いて弦楽器が登場しました。



Gakkigaku Shiryōkan, Kunitachi College of Music



弦楽器の原型として一般に考えられているのは狩猟の弓です。弓を使用していた原始人たちが弓の弦をはじいたり叩いたりしてこの道具を楽器として利用したのではないかと考えられています。この楽器はしばしば「ヒョウタン」などを付けて音量を増大させ、音楽に使うとして「楽弓」(がっきょう)と呼ばれました。

一方原始的な弦の共鳴のために地面に穴を利用する楽器も、各地の民族で見ることが出来ます。「グランド・ツィター」と呼ばれ、今もインドネシアのジャワなどなどで使われています。地面に穴をほり、穴を皮でおおい、その穴から立てた棒に弦を張ります。演奏者はこの弦を叩いたりこすりたりして音を出すそうです。

「ツィター」とは、楽器分類上、弦楽器の中で、弦が胴面とほぼ平行に張られ、ギターのような棹や弦を張るための特徴的な突起物を持たない楽器を指します。

く各地のツィター



Gakkigaku Shiryōkan, Kunitachi College of Music.



Gakkigaku Shiryōkan, Kunitachi College of Music.



各地のツィター見たときに埴輪の手にしている琴に似ている  
 と思いました。ツィターは、地球を共鳴させて音を出しているとも言えます。  
 そのため、埴輪の琴も、そのような神聖な楽器だったのでないかと思い  
 ました。その神聖な楽器を任される人なら、高い家からの人だったのでない  
 かと考えました。

『古事記』や『日本書紀』にも天皇や神と琴の関係が記されています。  
 ここからも、古代において琴が国の政治に関して神のおまげを聞くため  
 に天皇あるいは重臣が弾く弦楽器であったことが分かります。

### 5. 埴輪の服装



次に、埴輪の服装から人物を考えてみます。  
 当時の服装は上着と、男子はズボン、女子はスカート  
 が基本となっています。弥生時代の冒頭衣と呼ばれるワ  
 ンピースに比べ、現在と同じ、ツーピースであることが  
 わかります。

一友頭や首、胸、腕、腰には、さまざまな冠帽子  
 や装身具を始めとして、武器や仕事の道具などいろいろ  
 な物を身につけて表現されています。かみの毛は、いず  
 れも長はつで男子がかみを左右に分けて結ぶ美豆良(みずら)と呼ばれる  
 かみ型、女子が頭の上で前後に分け束ねたかみ型をしています。



それでは、埴輪の服装を改めて見てみます。  
 左の埴輪は、群馬県高崎市八幡原町出土の、  
 盛装男子埴輪です。絵本に出てきそうな冠  
 をかぶり、長いかみを結び、顔にお化粧をし  
 て首飾りをつけた、まさしく古墳の被葬者で  
 ある王の埴輪です。あぐらをかいて、  
 左腰に下げた刀に手をやるしゅん閑です。  
 冠と腕と胴体の一部は補修ですが、他の  
 部分は実物が残っています。背中まで造形し  
 ているので、服装も推定できます。

王の埴輪と比べながら、琴を弾く男子の服装を見てみました。

①帽子のような物をかぶっている。頭にひものような物を巻いているとも考えられる。冠ではないため、王ではない。

②髪は長く、二つに分けて前のほうに結んでいる。

③顔にお化粧をしている。  
古墳時代の赤いお化粧は、遺跡からの赤い色の原料となった花粉の発見からも知ることができている。  
赤だった理由は、太陽や血を表し、生命を連想させる色というのが有力の説である。今よりも死への恐怖や自然への畏怖の念が強かった時代、赤い色は人々を護る呪力を持つ特別な色と考えられていた。

④首飾りを着けている。  
王の物より石が少なく見えます。

⑤手に甲手をはめている。

⑥くつのような物をはいている。  
くつを止めるためか、飾りが分らないが、ひもがっついていて

⑦こしにかののような物をつけている。



## 6.まとめ

琴を弾く男子について、琴という楽器と服装からたくさんのごことを読み取ることができました。

まずは、王にとっても近い身分の男性だったこと、武装に近い、りばな服を着て、はなやかなお化粧をしていることから、まつりや儀式を行う立場だったことが分かりました。また、音楽家というより、人と神をつなぐような音、リズムを奏でる存在だったと思います。

埴輪は、王が死後の世界でも、安心できるように、自分の周りに常に置いておきたい物・動物・人物などを型どった物です。なので、琴を弾く男子は、王からも信らいされるようなすぐれた人物だったのではないかと考えました。

ぼくは、今回音楽の関わった歴史を調べてみて、とても楽しく進められました。また、歴史と深く関わりのある楽器や音楽を見つけて、調べてみたいです。

## &lt;参考資料&gt;

- 東国文化富り読本～古代ぐんまを探険しよう～ / 群馬県
- 社会科資料集最新資料6年 / 正進社
- 巨大古墳 前方後円墳の謎を解く / 森 浩一 草思社
- 学研まんが日本の歴史別巻 文化遺産学習事典 / 学研
- ニッポン美術たんけん 第1巻 / 日本図書センター
- 楽器図鑑 / ニール・アードレー あすなろ書房
- 楽器学入門 / 宇重 信郎 時事通信社

- 京都国立博物館HP
- 横須賀市自然・人物博物館HP
- 国立音楽大学楽器学資料館HP
- 武蔵野音楽大学HP
- 天理大学附属天理参考館HP
- ポーラ文化研究所HP
- 伊勢崎市 HP
- 太田市 HP